

「主イエスに従う人々」

ルカによる福音書23章24－28節

森島 牧人 牧師

処刑場のゴルゴタに向かって引かれて行く主イエス、しかしそんな主イエスに従って行く人々がいたと、今日与えられた聖書は語っています。それは「人々はイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというキレネ人を捕まえて、十字架を背負わせ、イエスの後ろから運ばせた。民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエスに従った。…」(ルカ23:26－28)と記されています。

この中に出て来る<主イエスに従った人々>に共通しているのは、彼らはみんな引かれて行く主イエスの<後ろについて歩いて行った>ということです。シモンはむりやり十字架を背負わされて主イエスの後に従って歩いて行きましたし、民衆や泣き女たちも、主に従ってぞろぞろと進んで行ったのです。

この時の彼らの<従う>には<follow>が用いられていて、主イエスがガリラヤ湖畔で漁師のペトロたちに言われた「わたしについて来なさい:Come, follow me」(マルコ1:17など)と同じものです。主イエスの弟子のことを<キリストフォロス>と言いますが、シモンも民衆も泣き女もみんな弟子でないにもかかわらず、なぜ弟子たちが主に従った時のものと同じ言葉が使われているのか、少し不自然に思えます。しかし、福音書の続編である使徒言行録の執筆者であるルカが敢えてこのような語り方をしていることにこそ、重要なテーマがそこにあることを、私たちは気付かなければなりません。つまりルカは、一人の人間が主イエスに従って行く者となる時、一体どんなことが起こるのか、そして人が主に従って行く歩みには何が求められるのかを、ここで語ろうとしているのです。

さて、この出来事の中のシモンですが、彼はこの時まで主イエスに会ったこともないキレネ地方のユダヤ人でした。逾越祭でたまたまエルサレムに出て来ていて、多分体格が良かったのでしょう、兵士の目にとまり、倒れた主の十字架を担ぐことになったのです。死刑囚の十字架を背負うなど思ってもみなかったシモンは、何という貧乏くじを引いたことかと、嘆いたに違いありません。しかし、ルカ福音書は、そんなシモンの姿に主イエスに従う信仰者の姿を見ているのです。ルカ9:23には「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」、14:27には「自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。」との主の御言葉があります。ルカ福音書は<十字架を背負って主イエスについて行く>ことが弟子たる者、信仰者の在り方だと、繰り返し語っているのです。

十字架を背負って従うという弟子の在り方を、そのまま実行することになったシモンですが、それは自分から進んでではなく、押し付けられて仕方なくというものでした。しかしルカは、まさにそんな彼の姿に、信仰者の在り方を見るというのです。

考えてみますと、私たちも決して自分から積極的に信仰者になったものではありません。シモンと同じように、思いがけず主イエス・キリストと出会い、バプテスマを受け、主と共に歩む中で、救いの喜びに生きることは自分の十字架を背負って主イエスに従うことでもあることを知ったのです。つまり十字架を背負って従うということは、主イエスの救いに与って生きて行く中で、救いの喜びと共に背負うべき十字架もまた与えられる、ということなのです。

自分の意志とは無関係に十字架を背負わされる時、疑問や不満を持ってしまう私たちですが、それでも十字架を放り出すのではなく、「自分の十字架を背負ってわたしに従いなさい」との主イエスの御言葉を聞いて行く中で、改めて与えられた十字架を自覚的に背負う者となって行くのです。

シモンにも、そのようなことが起こったのです。キレネ地方の男の名が二人の息子の名と共に聖書に残されている、それは主イエスの復活後信仰者となったシモンがその家族を導いたこと、教会の人々がそんな一家を喜んで迎え入れたことを示すものです。つまり逃げることも出来ず仕方なく主の十字架を背負ったシモンは、それをきっかけに、本当の意味での十字架を背負って主に従う者となったのです。こうしてキリストフォロスが<クリスチャン>という言葉になって行きました。シモンの人生を変える主イエスとの出会いが、彼の人生の歩みの中のあの瞬間にあったのです。聖書はそのことを私たちに伝えているのです。

(説教要約 羽入田悦子)